

ヘンリー・ジェイムズのアメリカ 文学への寄与 (その二)

沖 田 一

前号で述べるべきだったことをはじめに一言しておきたい。それはアメリカ文学でジェイムズが影響を与えたと思われる作家を私がどうして選んだかということだ。もちろん読書中にそれと気がついた人もいる。F. Scott Fitzgerald: *The Great Gatsby* や, W. Faulkner: *Light in August*, W. Cather: *A Lost Lady* ではすぐジェイムズを思い浮べた。しかし批評家たちも彼らへの影響をすでに指摘していることをあとで知った。Edith Wharton はジェイムズを研究しているときからすでに念頭にあった。その他 W. D. Howells や E. Hemingway は R. P. Blackmur⁽¹⁾ から教えられたが、ブラックマーはジェイムズの影響が見えるとか、彼なしでは考えられないといっているだけで、それ以外の詳細なことには何も触れていない。H. B. Fuller⁽²⁾ や A. D. Sedgwick に影響があるらしいことは V. W. Brooks から教えられた。

Ⅲ Henry Blake Fuller (1857—1929)

The Chevalier of Pensieri-Vani (1890)⁽¹⁾ はフラーの数度のヨーロッパ旅行の最初の成果だ。名も知れないアメリカ人がイタリーの中部西海岸地方をゆっくりと放浪している。古美術を愛して探し求め、古い風俗習慣に出くわしては溜息をつき、あるときは孤独の少女を苦心してオペラの初舞台に立たせて喜ぶ。もう初老だが、探究の邪魔になるといって妻帯しない。ある日大聖堂でミサの儀が行われようとしたとき、オルガン弾きが事故で欠席したので一同は当惑した。そのとき音楽の素養のあるこのアメリカ人がうまく代役を勤めた。そして「騎士」の称号を与えられる。彼は自分をヨーロッパとアメリカとの中間の空しい存在だと感じている。He felt his position one of peculiar hardship. Birth and habit drew him in one direction; culture and aspiration, in another; but he had never been a good American, and he feared he should never make a good European. He was between two fires, both of which scorched him; between two stools, neither of which offered him a comfortable seat; between the two horns of a dilemma, each of which seemed more

(1) *Literary History of the United States*. Edited by R. E. Spiller and Others. Macmillan, 1948.

(2) *The Confident Years 1885-1915*. J. M. Dent & Sons, 1954.

(1) 使用版: *The Chevalier of Pensieri-Vani*. By Henry B. Fuller. New York, The Century Co., 1892, 4th ed. revised.

cruelly sharp than the other. (p. 177) だからこの作品の一人称の話者は彼を「空しい悔恨の騎士」と呼ぶのだ。ただしこの主人公の素性も来歴もはっきりしないのに、こういうことばが出るのは唐突という感じがなくてもない。またイタリーに全面的に傾倒しているかのように見える「騎士」の内面の矛盾はここではじめて表明されるのだが、これもとってつけの感じだ。これはジェイムズが若いときから、特に中年以後になってからもった感じと同じだろう。ただしジェイムズはフラーのようにどうにも動きのとれない立場に立って、感傷の涙を流すしかない作家ではなかった。

当時はアメリカ文学に国際小説のブームがあり、これはジェイムズやハウエルズがはじめたものだ。フラーやウォートンや、次に述べるセジックなどはこの波に乗って書いた。「空しい悔恨の騎士」もこの一環をなすものだが、素材的に見ると、考古学者のイタリー感傷紀行の観がある。とりたてて述べるほどの筋はないが、ペルギノ筆の *Madonna Incognita* という絵を求めての遍歴が筋といえば筋だろう。ある日「騎士」はタスカニーのある町について昼食をとったことがある。その地方も天気も何もかにもが「騎士」にとってはあつらえ向きだった。The weather was charming—bright, yet cool; the country was ravishing, being in the first full green of spring; and the country-folk, flocking to or from some great *fiesta*, filled the winding and undulating roads with a gay excess of life and color. The cypressed villas, the ruinous old abbeys in delightful Gothic brickwork, the *campanili* of village churches rising from the olived slopes of hillsides, the twisted graces of vine-wreathed *pergole*, the wide flapping straw hats of the women trudging by, the jauntily carried jackets of the men, the gay romping of blossom-snatching children, the bustle of roadside *osterie*, the slow jolting of ox-carts along the common highway, the sturdy-arched, low-roofed farm-houses, the flowers, the sunshine, the lightly stirring breeze,—all the thousand things that combine in that inexhaustible feast of grace and beauty and social and historical interest which Tuscany knows so well how to spread, caused our two friends more than once quite to lose sight of the great undertaking that they had been commissioned to carry through……(pp. 34-35) こういう主旨と文体の文章には、イタリー旅行をしているジェイムズが在米の雑誌社へ送った通信文の中にいくらかでも見出すことができる。ジェイムズとの関連では以上のことが考えられるほかに、特に *A Passionate Pilgrim* を忘れてはならないだろう。

フラーとジェイムズとの関係を知るいわゆる伝記的資料なるものは私は一つも知らない。しかしこの作品そのものが動かし難い資料だと思う。フラーがこの作品を出す15年前にジェイムズはすでに *A Passionate Pilgrim* (1875) を発表している。彼の古い英国に対する抑え難いあこがれを表白したものだ。そしてここに出るアメリカ人サールは生れ代ってフラーの「騎士」になったといっても過言ではない。サールでも「騎士」でも、現代人から見ればがまんのならないたわけものぐらいにしか見えないうら。そして両作品とも一人称の傍観者が終始眺め、

主人公が独身主義を標榜しているのも偶然の一致だろうか。

文学史によると、⁽²⁾ フラーの作品は二期に分れ、前期はイタリーを扱い、後期はハウエルズに促されてシカゴを扱ったもので、ジェイムズとの関連で考えられるのは前期のものだという。前期には「空しい悔恨の騎士」以外に同様の作品を二つ書いているが、私が手に入れたのは第一作だけだった。

IV Anne Douglas Sedgwick (1873—1935)

女史は New Jersey の生れで、9歳のとき英国へ連れて行かれ、それ以来ヨーロッパですごした。1908年英国の作家 Basil de Selincourt と結婚した。⁽¹⁾ 女史はウォートン夫人とはちがって、ジェイムズに一、二度会ったことがあるぐらいで深く接触した人ではない。彼女には10幾篇の長篇と書翰集が一冊ある。私に利用できたのは次に述べる3長篇と書翰集とだけだった。⁽²⁾ これでは女史とジェイムズの関連をみるには不十分かもしれないが、幸い3長篇は彼女を代表するものなのでいささか意を強うしている。書翰集は適当に選ばれたものであって、どこまで彼女を伝えているか疑問でもあるが、参考としてみるにはたりよう。

⁽³⁾ *Tante* (1911) は一面女流天才の心理的研究でもあり、一面アメリカ人とヨーロッパ人との対比でもある。Madame Okraska は未亡人で50歳近い著明なピアニストだ。父はポーランド人で、New Orleans で音楽を教えていたことがある。夫人は芸術家によく見られるような二重人格者であり、わがままで尊大で、嫉妬深い独裁者だ。子供のない夫人は Karen を養女にしてかわいがっている。カーレンは夫人を天才として非常に崇拜している。夫人はカーレンに自分のことを「おばさま」と呼ばせている。カーレンは父はアメリカ人で母はノールウェイ人という複雑な国籍で、著者によると秩序のある社会的背景をもたない非キリスト教徒だとある。この中に英国の青年弁護士 Gregory Jardine が投入せられる。彼は制度や宗教的儀式を重んじる。彼から見ると音楽などは文明生活の便利な附属物で、オクラスカ夫人などの存在は奇態で異質のものに思える。こういうジャーディンがカーレンを愛して結婚することから葛藤が生れる。養母を敬愛するカーレンは、夫から養母を危険な女だといわれて溝ができ、一度は夫のもとを離れて養母のもとへ帰るが、オクラスカ夫人の狂気じみた面がしだいにわかりだして、夫のもとへもどるという。ジャーディンとカーレンを和解させたのが「とても愉快的な老アメリカ人」の Mrs. Talcott だったというのも何かの意味があるだろう。これだけのもので、別に深い感銘を与える作品でもない。ジェイムズでは意識の移動(前号 p. 62 参照)がよく起るが、この作品でそれらしいものに一箇所気がついた。夫人の崇拜者の一人に Miss Scrotton とい

(2) *The American Novel 1789-1939* By Carl Van Doren, MacMillan, 1959.

(1) *The Oxford Companion to American Literature*. 1956.

(2) *Anne Douglas Sedgwick. A Portrait in Letters*. Chosen and Edited by Basil de Selincourt, Houghton Mifflin Co., 1936.

(3) The Century Co., 1912.

う人がいて、次のように考える。

She mused, she was absent, yet she knew, and knew that Mercedes (=Madame Okrasha) knew, that never before in all their intercourse had she ventured on such a speech. (pp. 124-5)

⁽⁴⁾
Adrienne Toner (1922) はアメリカ対英国の一研究だ。アドリアンヌ・トウナーは美しいアメリカ娘だ。彼女は強い性格で冒険を好み、何でも変革してしまう。「あなたたちは教会をとおして真理に到達なさいますが、わたしは自然と愛と人生をとおして真理に到達します」(p. 47) と英人に向って言う。こういう彼女が英国へ来て保守的な家族の長子 Barney Chadwick を愛して結婚する。案の定お人良しのバーニーは妻に圧倒される。バーニーの妹 Meg が妻のある男を愛して悶着を起したとき、アドリアンヌはメグを支持した。こうしてチャドウィック家の平和は粉碎される。こうした彼女ではあるが、他人に与えたもろもろの打撃をとおしてしだいに謙遜と理解の域に達するという。国際関連を除いてはジェイムズ的なところはほとんど見えない。

⁽⁵⁾
The Little Girl (1924) は人生や恋愛についての英人の考え方とフランス人の考え方とを対照させたもの。Madame Vervier は利根的なフランスの女で、今までにもいろいろな男性と交渉があった。娘の Alix も母親の感化で、「男は外で働き、女は家において子供というものがあるから、男の方で別な方面に愛着ができてよいではないか」と考えている。バービエ夫人は娘が邪魔にもなるし、また良縁をえさせたいためあって、英人でもとの自分の愛人(数ヶ月前戦死) Captain Owen の家へアリーを送る。そこにはまじめな弟 Giles がいてアリーを迎える。二人はしだいに親しくなる。ジャイルズはアリーについてフランスへ渡り、母親に会ってみる。そしてきらびやかだが危険な女だということを知る。さらに夫人の友人 Maubert は、「私は情熱愛と情愛との二つを認め、妻には後者を、情婦には前者を求めるのです」などという。そういうことを見聞しているうちジャイルズは英国の女性とフランスの女性との間に民族的差違を認める。また身分ちがいの縁組を英国では一種のロマンスとみるのに、社会的階級を重要視するフランスではそういうものがないこともわかる。フランスには自由はない。自由のある英国へ帰って、自分の意志にしたがって結婚しようとジャイルズと交際するうちしだいに英国的になる。少しおかしいことだが、ジャイルズには金も地位もないのに、夫人は彼を信頼して娘を英国へつれて帰ってくれという。ここでも国際的関連以外ではジェイムズらしい点はない。最後に女史の書翰で、ここに関係のある部分を見よう。

May 23rd, 1900, To Mrs. James Pitman. Mrs. Chapin 邸ではじめてジェイムズと会食したことが書かれ、そのときの印象をこう述べている。H. J. has shaved off his beard and is now clean-shaved, a rather stout middle-aged man, with a large, regular, pale face, cold yet kind grey eyes, and something the look of a clever French priest in secular

(4) Houghton Mifflin Co., 1922.

(5) Houghton Co., 1924.

dress. He has a very hesitating yet decisive way of speaking—I mean that the thought is decisive and the search for its expression gives one an impression of fastidious choice; I like him in the talk we had—all about dogs; he adores them.

August 1st, 1899, To Mrs. James Pitman……And Henry James's 'Awkward Age'?—a wonderful production at times (indeed I find his medium of expression very exasperating) but, in its final effect, really magnificent; the character of Nanda is a masterpiece, so mentally corrupt (if one can call *knowledge* of evil, corruption) and morally so splendid. One gets a little tired, though, of the decadent *milieu* he depicts so constantly of late—and of people who have no moral sense but only exquisite consciousness of everything and perfect taste; I never could see why with merely the best of taste one should not build for oneself an ethical edifice of some sort; for from a purely aesthetic standpoint goodness is beautiful, and one might wish to be beautiful rather than ugly. 女史がいつ頃からジェームズを読んでいたか不明だが、彼に親しんでいたことはこれからもわかる。同感できる点とそうでない点とを区別している。

June 16th, 1902, To Miss Katherine Dunham. ウォートン女史の *The Valley of Decision* と *Artemis to Acteon* とを読んで女史の博識に驚き、自分はとうていおよばないといって落胆している。

Sept. 10th, 1902, To Miss Katherine Dunham……I have read a little; Henry James's last—'The Wings of the Dove'—one of the books; I wonder what you think of it. I always feel about Henry James that he has taken England 'too hard' as it were. There is something just a little—well, what shall I say? ignoble, in his attitude about the international question. As for Milly Theale, she might have been wholly exquisite, had he not just tainted her a little with that silly self-consciousness. I am so glad to have found out that Americans are *not* like the ones he draws. *He* ought to come to America! But he is afraid of America. I don't know him at all, you know (except one meeting when I thought him very dear), but he always seems to me, through his books, like a person who has always been too afraid of *ugliness*. I don't believe he has ever taken any *risks* in his life, or ever 'lived out dangerously into the world.' 現実のアメリカ人はジェームズが描くようなものではないというが、その観察は正しいだろう。女史はジェームズが英人に「あまりにつらく当りすぎる」というが、以上の作品でみたとおり、女史の方では英人に対して「甘い」という感じがしないでもない。最後に彼は人生で危険を冒した人でないというが、それはそのとおりだと思う。

Oct. 13th, 1902, To Miss Katherine Dunham では、ジェームズが本質的でない瑣事に病的なまでに敏感だという。

Nov. 21st, 1903, To Mrs. James Pitman では再び *The Wings of the Dove* をとりあげ、

この作品は再読せねばならぬ。再読しないと、動機や混り合ったものや意図がつかめない。Milly は精妙に画布の上に生きているという。There's so little of her—hardly more than her dying breaths—no struggles, no obvious gestures—yet at the end one has a wonderful consciousness of her, very much what Merton Densher's must have been. And one never feels, at least in this one doesn't, that his reticence is a result of incapacity; he simply chooses to breathe Milly on to the canvas.

May 20th, 1920, To Mrs. James Pitman. 自作の *The Third Window* (1920)⁽⁶⁾ という作品に言及して, Rather unfortunately for me, the back-wash of the rather mean and hasty reaction from dear old Henry James has caught me because of the length of the story and I am cited, tiresomely, as a disciple; which I've never been, though doubtlessly we lesser writers of his epoch must have caught something of his vocabulary. Have you read his letters? They show his weakness and even absurdities and his loveableness, too, in quite a new light. Such a queer mixture of absurdity and dignity. They are entrancing reading.⁽⁷⁾

これを要するに女史はアメリカ人とヨーロッパ人とを, また英人とフランス人とを対比することを好んだ。それは女史がそういう国に住んで国情をよく知っていたからでもあるが, ジェイムズの影響が多少ないともいえない。また私が読んだ少数の作品からはジェイムズ好みの表現を多く摘出することはできなかったが, 女史自身も上の手紙の中でそれは認めており, Van Wyck Brooks も *The Confident Years* の中で Anne Douglas Sedgwick seemed at times another Edith Wharton, ensnared in the peculiar idiom and metaphors of James. (p. 253) と述べている。また上に述べたようにジェイムズ好みの作品も書いていて, それは女史自身も(自分は彼の弟子ではないといいつながら)認めている。これを要するにセジック女史はある程度ジェイムズの影響を受けた。

V Willa Cather (1873—1947)⁽¹⁾

キャザーの作品にははじめから終りまでジェイムズの影響があるように思えるので, 全面的に眺めてみたい。彼女はウォートンやセジックとはちがって一度もジェイムズに会っていない。しかし彼女の学生時代には彼の名声は少し衰えかけていたとはいえ, やはり文壇の大家だった。

(6) *The Oxford Companion to American Literature* (3 ed.) によると, この作品は, 自分が崇拝していた男の未亡人が再婚しようとするのを, 超自然的手段で邪魔しようとする婦人のことを書いたものだという, 主題はいかにもジェイムズ好みだ。

(7) 文中のジェイムズの書翰とは次のものをさすだろう。 *The Letters of Henry James*. Selected and Edited by Percy Lubbock. Scribner's, 1920. 2 vols.

(1) 本論文は *The Albion*, New Series No. 8 (November 1961) に「H. James から W. Cather へ」と題してのせたものを主体とし, それをその後入手した作品や資料で増補したものである。また改訂したところも多い。

当時アメリカの若い人たちがきそって彼を読んだことは容易に想像できる。キャザーも例外でないどころか、耽読し傾倒していたようだ。 *Willa Cather's Campus Years* の編者 Shively が集めた資料によると、We often discussed Robert Browning, Henry James and Rudyard Kipling. The last two were just appearing over the horizon. とある。⁽²⁾ また彼女は彼を「当時の最も興味ある作家」だと考えていたという。⁽³⁾

(一)

先ず1912年の Alexander's Bridge までの習作期の作品を瞥見したい。彼女が作品を発表したのは1890年代で、世紀末にあたっている。その時代の風潮の一つは超自然を扱うことで、ジェイムズもそういう作品を十数篇残している。彼女が影響されたのは彼の初期・中期のもので、出現根拠の薄弱な超自然ものだったようだ。彼女自身も彼を模倣することからはじめたといっている。⁽⁴⁾ First Prize Story の *The Fear That Walks by Noonday* (1895) や *The Affair at Grover Station* (1900) はそういう短篇だ。前者は Dorothy Canfield が着想してキャザーが書きあげたという一種の合作もので、亡霊が現われて味方を勝たせるという内容だし、後者は殺害されたものが、黒板に青いチョークで自分の死体の所在を書いていたという怪談で、ジェイムズにも *The Romance of Certain Old Clothes* (1868) というそういう類の原始的作品がある。しかし1890年代で最も彼の模倣が目だつのは *The Count of Crow's Nest* (1896) だろう。シカゴに落ちぶれたヨーロッパの伯爵が下宿していて、発表されればヨーロッパ史に大変革をもたらすような古文書をもっている。彼は別に公表したくはないのだが、娘に三流どころの歌手があり、物質欲にかられて父の古文書をもち逃げするという。これが娘の愛人の眼をとおして書かれているのはジェイムズ式だ。またジェイムズはヨーロッパの貴族を無能で墮落した階級とみるが、ここでも力つきた貴族が現われる。さらに古文書趣味とか女性の貪欲性もジェイムズがよく扱う。この短篇はジェイムズの *Sir Dominick Ferrand* (1892) などから暗示をえたものだろう。男性は愛している女性から破滅的影響を受けることがある——つまり vampire theme がジェイムズの考えかたの一つだが、キャザーの *The Dance at Chevalier's* (1900) にもそういうふくみがある。以上の短篇は Mildred Bennett 編の *Early Stories of Willa Cather* (1957) に収めてある。

The Troll Garden (1905)⁽⁵⁾ には7短篇が収めてあり、このうち三つだけは強調しておく必要

(2) *Willa Cather's Campus Years*. Edited by James R. Shively, University of Nebraska Press. 1950. p. 138.

また *Willa Cather Living*. By Edith Lewis. (Alfred A. Knopf, 1953, p. 58) にもジェイムズが当時の若いアメリカ人に与えた影響が大きかったことが書いてある。

(3) *The World of Willa Cather*. By Mildred R. Bennett. University of Nebraska Press, 1961. pp. 203-4.

(4) *Early Stories of Willa Cather*. Selected and with Commentary by Mildred Bennett, 1957. p. 45.

(5) *The Troll Garden*, By Willa Sibert Cather. McClure, Phillips & Co. MCMV.

がある。開巻先ず *Flavia and her Artists* がある。Mrs. Flavia Hamilton は自分では芸術がわかると思っている。そして物質的に恵まれているところから、芸術家や学者を自分の豪華な邸宅に集めて得意になっている。次の文は夫人の喫煙室の描写だが、いかにもジェイムズぶりだ。Through the deepening dusk the firelight flickered upon the pipes and curious weapons on the wall, and threw an orange glow over the Turkish hangings. (pp. 16-7) Hamilton がこういう女となぜ結婚したのかという重要な点になると作者はまったく逃げ腰だ。Why or how a self-sufficient, rather, ascetic man of thirty, indifferent in manner, wholly negative in all other personal relations, should have doggedly wooed and finally married Flavia Malcolm, was a problem that had vexed older heads than Imogen's. (p. 12) この Imogen は言語学を専攻している娘で、フラビアを知っているところから夫人の招待に応じてハミルトン邸の客になる。彼女がこの邸宅へやってくる気になったのは、一つにはそこに来ているフランスの作者 M. Roux に会いたかったためでもあり、一つにはハミルトンが昔彼女が慕情をいただいた人だったからでもある。ハミルトンは休暇をイモウジェンの母の家ですごすのが常で、彼女は人形に対するような感情を彼にいただいていた。Summer after summer she had awaited his coming and wept at his departure, indifferent to the gayer young men who had called her their sweetheart, and laughed at everything she said. Although Hamilton never said so, she had been always quite sure that he was fond of her. (p. 28) ここらあたりも単に筆が込んでいるにすぎない。さてハミルトン邸へ来てみると芸術家たちは集っている。フラビアはルーから you are really remarkable (p. 27) などといわれて有頂天になっている。集っている芸術家の一人にフラビアのまたいここにあたる Miss Jemima Broadwood という女優があり、彼女は秘かにイモウジェンに自分の意見を述べる。I once met a blind girl, blind from birth, who could discuss the peculiarities of the Barbizon school with just Flavia's glibness and enthusiasm. (p. 39) 親戚のものからこう酷評されるのを聞いてイモウジェンはいたたまれない気がする。ルーは皆より一足先にこの邸宅を辞去していたが、新聞記者との会見でアメリカ婦人のことにおよび、その例としてフラビアのことを痛烈に諷刺し、それが新聞に出て、フラビアを除きハミルトン邸の人々の眼に触れた。ハミルトンは妻の俗物を知りながら、自分も俗物になり下ってルーを非難し、そうすることで妻をかばってやる。感受性に富む娘の眼をとおして眺めるなどは最もジェイムズ的だ。しかし首尾一貫して彼女の眼をとおして眺められないから視点的にあぶなっかしい気がする。それよりも何よりもジェイムズ調に注意すべきだろう。

The Garden Lodge でも芸術家が扱われる。Caroline Noble の父は怠惰な音楽家で、そのためいつも貧乏だった。兄は画家になったが、父に似て仕事をせず、そのため自殺し、母もその衝撃で亡くなった。こういうことをみてきたキャロラインは、衝動的でなく、冷静で極度に実際的な人間になろうと決心する。このためピアニストとしてかなり成功し、富裕な人と結婚する。やがて著名なテナーがいこいを求めて彼女の家に止宿することになる。このテナーが来

るとニューヨーク中の女が昂奮する箇所があるが、描写は古くて定型的だ。…… sisters of charity and overworked shop-girls, who received him devoutly; withered women who had taken doctorate degrees and who worshipped furtively through prism spectacles; business women of affairs, the Amazons who dwelt afar from men in the stony fastnesses of apartment houses. (p. 102) この歌手はノウブル邸の庭の小屋でキャロラインの伴奏でよく歌った。この歌手が去ってからも彼女はその小屋へよく行った。ある夜中に一人で小屋へ行き、彼が自分と恋に陥りそうになったことなどを夢想した。しかし朝になると何くわぬ顔で夫と食卓につく。けっきょく父の娘でしかないという主題だろう。これが三つのうちでいちばんジェイムズ調が薄い。

The Marriage of Phaedra でも芸術家が主人公になる。偉大な画家 Hugh Treffinger は *The Marriage of Phaedra* という傑作だが未完の絵を残して没する。それから3年ほどしてアメリカの画家 MacMaster がトレフィンガーを研究するためロンドンを訪れる。トレフィンガーの画室には忠実な下男の James がまだ番をしている。マクマスターはこの下男の信頼をえてトレフィンガーの私生活をいろいろ聞き出す。故人は貧民から身を起した人で、上流社会の人だが芸術に理解のない Ellen と結婚したことは不幸なことだった。彼女は夫の素性をさげすみきっていた。今彼女は再婚しようとしていて、結婚資金に問題の絵を売ろうとしている。下男によると、この絵は未完成のままでは売ってはならぬと主人からいわれていたものだ。下男はこの絵をもって逃げようとするが、マクマスターはそれを引き止める。主題は芸術家対芸術に理解のない俗人の問題で、ジェイムズも *The Author of Beltraffio* (1884) などでとり上げている。またマクマスターが下男をとおしてトレフィンガーの私生活をのぞくというあたりの技巧もジェイムズ的だ。下男はあくまでよくある忠実型だし、出てくる画商のユダヤ人もあくまで金銭に抜目のない類型で、新鮮味に乏しく、深みもたりない。以上の三つの短篇はキャザー⁽⁶⁾のちの短篇集から略しているが、作者も模倣的だったことが不満だったからだろう。

Youth and the Bright Medusa (1920) の中の一編 *Coming, Aphrodite* は1910年頃の作品と思われる。ここに出る男女二人は共に芸術家だが、女の方は世俗的名声を求めるのに、男の方はそれを拒否する。これはジェイムズの中によく出てくる対立で、これを読んでいてジェイムズを読んでいるような錯覚に陥ったほどだった。

Alexander's Bridge (1912)⁽⁷⁾ は読めば読むほどジェイムズを思い出させる。頑丈なアメリカ

(6) The World of W. Cather の著者 Mildred R. Bennett によると、キャザーは1902年ヨーロッパに遊び、多くの画廊を見てまわったが、ロンドンで Sir Edward Burne-Jones の画室を見て深い印象を受け、それを背景にしてこの作品を書いたのだという。ベネットは下男のジェイムズという名に興味をもって、いろいろ調査したが、パンジョーンズ家にはこの名の下男も執事もいたことがないことがわかった。それで半ば冗談に、このジェイムズはヘンリー・ジェイムズではないかといっている。

Willa Cather in Europe, Her Own Story of the First Journey. With an Introduction and Incidental Notes by George N. Kates. (Alfred A. Knopf, 1956) 中の London: Burne-Jones's Studio を見ると James, valet to Sir Edward's person and to his art と出ている。

(7) Houghton Mifflin Co., 1912, 175 p.

人技師 Alexander にはボストンにいる同国人の妻のほかに、ロンドンに旧知の愛人でイギリスの女優 Hilda がいる。この二人の女性に板挟みになって自滅するという内容だ。妻はアメリカと現実と、愛人はヨーロッパと理想を象徴するものだろう。妻は本来のアレグザンダーなのだが、それだけで満足できないで分身ともいうべきヒルダをも探求する。つまり二重性の研究であり、分身の可能性の探求でもある。ジェイムズは一生「もしそうでなかったら自分はどくなっただろう」という問題につかれた人だが、アレグザンダーも（あるいは当の作者も）そういう人間だった。しかし芸術家であれば誰しも程度の差こそあれそういう問題に悩まされないものはないだろうから、その点あながちジェイムズとの類似性を求めようとは思わない。問題は作品の展開のさせかただ。開巻主人公の旧師にあたる心理学者が出て、アレグザンダーの内面の弱点を予言的に指摘する。旧師は巻末になってもう一度顔を出し、次のように結んで首尾を一貫させているが、これなどあまりに人工的だ。“I liked him (=Alexander) just as he was; his deviations, too……He left an echo. The ripples go on in all of us.” (pp. 173-4) ここで心理学者を出すなどは手のうちが見えすいているが、こういう観察者はジェイムズ特有のものだ。アレグザンダーがロンドンへ行くと、そこには旧友の Mainhall がいる。彼は雑文作家で大の情報屋だ。こういうあまり重要でない人物の口をとおして読者にいろいろなことが伝達される。これはジェイムズのいわゆる *confidant* と称する技巧なのだが、キャザーの場合ではあまりにつごうよくできすぎている。最後になって主人公は架橋の仕事に従事している。そのときヒルダは興行でアメリカへ来ていた。架橋現場で思わぬ事故が起きて、責任者のアレグザンダーを呼ぶ電報が打たれる。しかし彼はヒルダと逢引きしていたため電報を受けとるのが一日おくれ、そのため橋は崩壊して彼自身も下敷きになって死ぬというのだが、このあたり逢引きの場面を書かないでそれと理解させるあたりはジェイムズから学んだものだろう。さらに舞台を両大陸にとるなどは（これは二重性という主題とも関係があるが）ジェイムズ得意の *international situation* だ。

以上で習作期を瞥見してきた。ここでいえることは、主題的にも技巧的にもジェイムズ調が濃いということだ。

(二)

キャザーが芸術の美を求めた「洞窟妖精の庭」から抜け出してネブラスカの原野へ向ったのは、先輩の Sarah Orne Jewett の忠告のためだった。キャザーはジュエットからの手紙を公表している。“The thing that teases the mind over and over for years, and at last gets itself put down rightly on paper—whether little or great, it belongs to Literature.”⁽⁸⁾ また Carrie Miner Sherwood はキャザーのおさな友だちの一人だが、彼女に *O Pioneers!* を贈り、その見返しに次のようにしたためている。This was the first time I walked off on

(8) *Not Under Forty*. By Willa Cather. Alfred A Knopf, 1953. 76 p.

my own feet—everything before was half real and half an imitation of writers whom I admired. In this one I hit the home pasture and found that I was Yance Sorgensen and not Henry James.⁽⁹⁾ これで見るとジェームズの影響がいかに大きかったかがわかる。ちなみに Yance Sorgensen とはノールウェイからの移民で、ウェブスター郡に Norway Farm を建設した人である。⁽¹⁰⁾

ともあれこれから彼女の作品の質はちがってくるし、したがってジェームズからの影響もちがったものになる。O Pioneers! (1913)⁽¹¹⁾ は大地讃美と開拓者たちの自然への挑戦が主題であり、さらにこまかくみれば、新大陸における旧大陸の人々の問題とも考えられる。また次の The Song of the Lark (1915)⁽¹²⁾ では開拓者に代って中西部出身の少女が中心人物になり、自然への挑戦が音楽への挑戦におきかえられている。ここでもアメリカ人の可能性を実現する糧はヨーロッパにあるというのだから、両作品とも Alexander's Bridge に引きつづいて国際関連を扱ったことになり、ジェームズの主題の延長といえないではない。しかし新大陸におけるヨーロッパ人を扱うのだから (O Pioneers! や次に述べる My Antonia などにおいて)、素材的にすでにそういう問題をはじめからふくんでいる。だからジェームズの影響はあまり強調できないかもしれない。この点従来あまり強調されすぎてはいないだろうか。⁽¹³⁾あるいはランドルのいうように、そういう人物をもち出すのは、庶民を描こうという作者の意図と、両大陸対比というジェームズ的主題との両方につかえるのに好つごうだった、という方がふさわしいかもしれない。⁽¹⁴⁾

My Antonia (1918)⁽¹⁵⁾ では感性の鋭い Jim Burden を観察者に仕立てている。作者は自作のはしがきの中で、こういう手法を自発的に考え出したように述べているが、しかしこういう人物を設定して作品を自分から切り離し、間接的効果を出す方法はジェームズがすでに What Masie Knew (1897) その他で使わずみのものである。(ここで興味があるのは、のちに述べる A Lost Lady でもそうであるように、女性のキャザーが男性の観察者を設定するのに、ジェームズはそういう人物を女性にすることが多いことだ。) こういう手法ではどうしても視野が局限されるから、これをどう打開するかは作者の手腕がかかっている。この作品でも中心人物ではなくて観察者だけが前面に押し出されているようなところがあって、全面的に成功している

(9) *The World of Willa Cather*. By Mildred R. Bennett. 1961. pp. 290-1.

(10) Ibid. p. 200.

(11) Houghton Mifflin Co., 1959 (30th impression).

(12) Houghton Mifflin Co., 1943.

(13) 例えば次の書物を見るとよい。

Willa Cather, A Critical Introduction. By David Daiches. Cornell University Press, 1951. p. 19.

(14) *The Landscape and the Looking Glass, Willa Cather's Search for Value*. By John H. Randall. Houghton Mifflin Co., 1960. p. 99.

(15) Houghton Mifflin Co., 1949.

とはいえないが、こういう欠点にもかかわらず読者に迫ってくるのは、アントニアの（そして作者の）強い内部推進力によるものだろう。

次に My Antonia と F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* とジェイムズとの関係を考えてみたい。最近フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* の手法が問題になっている。最初に注目したのはギルバート・セルデス⁽¹⁶⁾あたりで、ついでマルカム・カウリー⁽¹⁷⁾で、*The Great Gatsby* の劇的手法はおそらくイーディス・ウォートンから学んだものだろうという。ところでウォートンはこの手法をジェイムズから学んだのだから、*The Great Gatsby* はジェイムズの伝統を引くものだという。次にミラー⁽¹⁸⁾は My Antonia と *The Great Gatsby* の終末近くの表現のしかた、リズム、下降調など特に最後の部分のそういう点の類似を指摘している。

Whatever we had missed, we possessed together the precious, the incommunicable past.
(Cather)

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.
(Fitzgerald)

さらに両作品とも鋭敏な観察者を介在させている点に注意している。ミラーによると、フィッツジェラルドは直接ジェイムズに影響されたというあとはない。彼はコンラッドを熱読していたから、コンラッドから発想をえただろう。ところでコンラッドにはジェイムズの影響があるから間接にジェイムズの影響を受けたことになる。だからフィッツジェラルドはコンラッドとキャザーとの二人を念頭において *The Great Gatsby* を書いたのだろうという。私は前年度ウォートンにおよぼしたジェイムズの影響のことを書いたが、劇的手法となるとカウリーがいうほどの影響は認めなかった。私はミラー説をとりたい。

One of Ours (1922)⁽¹⁹⁾ ではアメリカ青年 Claude のヨーロッパ文化への開眼という点で国際関連を思わせるが、これは従属的テーマでもあるから、ことさらジェイムズを引合いに出すほどのこともあるまい。

キャザーは今までもジェイムズと同じように語句の選択や陰影に対して周到な注意を払ってきたが、それは *A Lost Lady* (1923)⁽²⁰⁾ になって頂点に達する。あまり教養もない物質的にお上品に生きてきた女性が、物質の支えを失えばどういう過程をたどるかという研究であると同時に、そういう女性にも同情を示しつつ、よい過去に対するかぎりない郷愁をこめたものだ。作者は最初 My Antonia と同じように Niel という少年の眼をとおして全編を見ようとした。ニールは法律を学びのち建築の勉強に移った少年だが、同時に Don Juan や Tom Jones を読

(16) *The Great Gatsby*. By Gilbert Seldes. (The Dial, August, 1925)

(17) *Three Novels of F. Scott Fitzgerald. The Great Gatsby with an Introduction by Malcolm Cowley*. Scribner's, 1953.

(18) *The Fictional Technique of Scott Fitzgerald*. By James E. Miller, Jr. Martinus Nijhoff (The Hague), 1957.

(19) Alfred A. Knopf, 1953.

(20) Ibid., 1958 (22nd printing).

む多感な少年でもあるということになっている。この少年の少年期から青年期へかけての観察だから視野は相当に広い。しかしサージャント⁽²¹⁾によると、ニールの眼だけをとおして書いた原稿を John Galsworthy に見せたところ、複雑微妙な女主人公の内面の観察を若者の眼に限定することは危険だという忠告があったので、最初の部分を全能的に描写することで現在のようになったのだという。このように全面的な間接描写ではないが、この作品では以前のものに比べてニールがジェイムズのいわゆる「鋭い中心意識」の役割を巧みにはたしている。Mrs. Forrester が次々と顛落過程をたどるが、観察者が多感で夫人を崇拜している少年だから、それだけ新鮮な驚きになる。しかも巧妙な比喻や省略法や間接法が駆使される。Constance という娘が途中で出るが、今までの作品でだったら作者は一つの挿話としてしか扱わないのに、ここではフォレスター夫人の顛落を照明するのに役にたっている。特に深い印象を与えるのは夫人が Sweet Water を去ってからの終末の部分だろう。その手法は人生の断面をパノラマ風に瞬間的に見せて、にわかに新しい局面に立ちいたったことを読者に意識させる。一種の二重間接法とでもいえるもので、ジェイムズも *Brooksmith* (1892) などで試みているが、キャザーの方が彼以上だともいえよう。しかし彼女はこれからの作品の終末でこの種の手法を使いすぎるきらいがないではない。

The Professor's House (1925)⁽²²⁾ の主題はキャザー独自のものだ。彼女は“On The Professor's House”⁽²³⁾ という一文で、この作品の発想について次のように述べている。先ず二つの実験をしたい。第一はフランスやスペインの小説によくあるように、長編の中へ短編を挿入することで、ここでは中間部にある“Tom Outland's Story”というのがそれにあたる。第二は彼女がパリーで見たオランダの絵の影響による。それは十分家具を備えつけた部屋の絵で、そこに四角な窓があって、窓から船の帆柱や海が見えた。それを見ていて世界中の港に静かに通うオランダ商船隊の印象がえられた。そういう印象を“Tom Outland's Story”から全編に与えたいという。そしてこの発想は成功し、全編を通じてトムが新風を送っている感じを受ける。しかし窓からものを見るという考えかたは何もキャザーの専売ではない。このことはジェイムズもしきりに述べている。批評の中だけでなく作品の中でも言及している。例えば *The Middle Years* (1893) の中に初老の Dencombe という病身な人が出る。彼の楽しみは窓からものを観察することで、窓からでなしにものを概観することはたまらないことだったという。ただしジェイムズの考えかたはある規制された範囲から（つきつめれば一箇の意識から）ものを見ようというのだから、キャザーの場合とは少しちがうかもしれない。

(三)

My Mortal Enemy (1926)⁽²⁴⁾ を論じる場合今までジェイムズを引合いに出した人はなかった

(21) *Willa Cather, A Memoir*. By Elizabeth Shepley Sergeant. J. B. Lippincott Co., 1953, pp. 187-8.

(22) Alfred A. Knopf, 1959 (12th printing).

(23) *On Writing, Critical Studies on Writing as an Art*. By Willa Cather, Alfred A. Knopf, 1953.

(24) Alfred A. Knopf, 1957.

と思う。しかし私はこの作品を考へてみたとき、ジェイムズを導入してみて氷解できると思つた点があるので、ここに私見を述べてみたいと思う。これは Myra という女性の精神史の追求である。Nellie Birdseye という娘があり、この人の伯母に Lydia という人がある。リディアはマイラの親友だったから、ネリーは伯母をとおし、また直接に観察した約15年間の一種の記録である。この手法はジェイムズ的だが、しかし今とりあげようとしているのはそんな表面的なことではない。孤児マイラは裕福な伯父にかわいがられて育てられていたが、伯父の意志に反して宗教的に自由な考へをもっている Oswald Henshawe と駆落ち結婚をする。彼女は独占欲が強く嫉妬深く、また自分はぜいたくをしなが、夫が貯金をしないといつて不平をいう気ままな女でもあつた。芸術を愛して芸術家と交わりもした。夫婦はしばらくは幸福だったが、やがてオスワルドが失職してから生活に困り、安アパートに部屋借りする身になる。マイラは病気で寝ついてしまったが、オスワルドは妻をやさしく看護しながら働きに出ていた。この頃から彼女は伯父に許しを乞ひたいという気持になつたり、亡友のためにミサをしてもらつたりする。黒檀の十字架を大切に身辺においておく女にもなる。あるとき神父が訪ねてきて、彼女はとても異常な女だといつて次のようにつけ加へた。“I wonder whether some of the saints of the early Church weren't a good deal like her.” (p. 111)

またマイラはネリーに看護してもらいながらうわごとのようによくこういつた。“I have been true in friendship; I have faithfully nursed others in sickness……Why must I die like this, alone with my mortal enemy?” ネリーはこの意味を考へてみて彼女なりにこう解釈する。“Violent natures like hers sometimes turn against themselves……against themselves and all their idolatries.” (p. 113) それからマイラは亡くなるのだが、その遺言には ‘her body should be cremated, and her ashes buried “in some lonely and unfrequented place in the mountains, or in the sea.”’ (p. 119) とあつた。

以上のようなことでは簡単すぎてわかりかねるだろうが、ケイツ⁽²⁵⁾はこの作品は不可解だといふ。しかしキャザー研究では有力なデインズやブラウンによると一応の解答は出されている。デインズ⁽²⁶⁾によると「私の終生の敵」とはオスワルドのことだといふ。夫を終生の敵と見なすようになるのはマイラの性格内の毒素の作用であるのに、読者はそれを見ることを許されぬ。大きく筆を振つてあまりに淡彩に描いてあるからわかりにくいので、彼女の性格を理解させるには今少しく探求的方法が必要だろうといふ。次にブラウン⁽²⁷⁾によると、オスワルドは彼女を正常な進路から逸脱させた偶像だから彼こそ「私の終生の敵」なのだ。夫は優しい人だが、彼女の夫に対する態度はこの優しさとは関係がない。それは彼女のアイルランド系の祖先の血のためであり、自分を育ててくれた激しい気性のわがままな伯父との血のつながりのためだが、そ

(25) *Five Stories by Willa Cather*. By George N. Kates. Vintage Books, 1956. p. 190.

(26) *Willa Cather, A Critical Introduction*. By David Daiches. 前出

(27) *Willa Cather, A Critical Biography*. By E. K. Brown (completed by Leon Edel). Alfred A. Knopf, 1953.

れでも彼女には宗教的な感情がある。死が近づくにつれ、自分がドイツの自由思想家と結婚したことで宗教から逸脱したため、伯父のいだいていた信仰へ返ることを激しく求める。神父が彼女を初期教会の聖徒のようであるかもしれないといった。しかし彼女には聖徒がもっている親切も慈悲も謙遜もないのでこの神父のことばには驚かされるが、しかしそのことはこの世俗的な女が世俗から通り抜けて根源的現実 (primary realities) にわれを忘れていた例証なのだ。彼女の終末近くになっての気分は St. Peter の気分に似ている。光と沈黙と孤独とを求め、風のそよぎを聞き、広い海原を見たいのだ。そして息を引くと、これがすべてかなえられたことは彼女の勝利なのだ。そして最後にキャザーの節約と集中化とはすばらしいという。以上がブラウンの所見だ。

しかしダイムズにせよブラウンにせよわたくしたちを十分に納得させているだろうか。表面にだけこだわっているように思えないでもない。次にまちがっているかもしれないが私見を述べよう。私の出発点は、宗教的に覚醒した妻が自分に親切にしてくれた夫にそういう態度をとるだろうかという常識論だ。ドイツの宗教的自由思想に対するカトリック教の反撃だといえればそれまでだが、それでは文学作品としてあまりに薄すぎるのではなからうか。宗教に回心した初期のある段階ではそういう見かたをすることもあってもいいかもしれないが、それが最終的態度だといえるのでは受けとれない。そういう自覚をわざわざ文学作品としてとりあげる価値にも疑問もたれてくる。私は端的に言って「私の終生の敵」とはオスワルドではなくてマイラ自身のことだと思ふ。ブラウンは作者の節約と集中化とをほめているが、そういうぼかした方法でしか表現しないから誤解を生みやすいのだ。死期が迫って宗教的自覚に達したことは、伯父に許しを乞うとしたり、亡友のためにミサを営んでもらったことからわかる。そして彼女のような性格は自らに敵対し、ついでその崇拜するものへ敵対するものだ、と作者がネリーに代っていわせている。自らに刃向うことは自分こそ終生の敵であることを認めているのだ。これを第一の到達点としておく。この点に到達したものであれば自分に優しくしてくれた夫に感謝こそすべきだ。ところが彼は自由思想家で自分を誤らせた人だ。つまり感謝すべき人でもあり憎むべき人でもある。ここに彼女の苦悩がある。だから初期教会の歴史にもたとえられるのだ。この苦悩を第二の到達点としておく。第二のものは第一のものの副次的所産なのだ。第一のものこそ重要なのだ。ところがキャザーはこの重要な第一のことをあたかも自明のことのよう大胆に削除して、単にある箇所ですらネリーに暗示的にいわせているにすぎない。そして第二のことばかり書きたてる。しかし第二のものを大きく扱えば扱うほど、裏面に第一のものがあることをにおわせる。死後は遺骨をどこか人目につかないところへ埋めてくれなどというの、自分を敵視していることの一つの傍証でもあるだろう。そうだとすると大胆な手法だといわねばなるまい。

ジェイムズは間接法の種々相を考え抜いた人だから、今AとBとがあって相反する場合、Aを力説したいためことさらにBを力説するというようなことも考えた。例えば *The Awkward Age* (1899) に次のような場面がある。The Duchess は Lord Petherton を愛している。あ

る日夫人は Brook 邸を訪問していたが、これからペザートンもブルック邸へくることがわかっているのに、ことさら愛人がくる前に辞去してしまう。これを別の女性が観察していて、これこそ夫人とペザートンとの間に何かがある確証だ⁽²⁸⁾という。この種のジェイムズの手法をキャザーが変形適用したものだ⁽²⁹⁾と考えたい。サージャントは次のようなことを書いている。1920年より少し前のことキャザーはジェイムズの *Notes on Novelists* (1914) を読んでいた。その中で彼は創作者と報告者とを区別し、報告者の法則がどんな哲学的なものでも、報告者の法則は創作者の法則とは別種のものだと書いている。“So that the two laws can with no sort of harmony and congruity make one household.” この手のこんだ彼のいいまわしに彼女は興味をもち、またその意見に同意したという。彼女も報告者の法則である「列挙」を退けて、文学は暗示によるべきだ⁽³⁰⁾という。これを彼女の文学論である “*The Novel Demeublé*”⁽³¹⁾ の中でふえんして、小説は豊富な輝く流れの中から永遠の材料を選択せねばならず、芸術の高度の過程は単純化の過程でなければならぬともいっている。つまり「選択と単純化」なので、これはだいたいジェイムズの考えかたに近い。My Mortal Enemy ではこの「選択と単純化」とを一般の理解を越えるほどの程度にまで適用したものではないだろうか。ただこういう手法でどれだけ成功しているかは別問題だが、私のように見てはじめて文学としての意味があるのではないだろうか。私のような見かたが（少くとも結論が）他にないことはない。ガイスマーは *Willa Cather: Lady in the Wilderness*⁽³²⁾ で過程は十分には説明していないが、マイラは終局的には自分が終生の敵だと語ったのだといっている。

近頃ランドルの「風景と鏡」（前出）というキャザー研究書が出た。その中でこの作品に *Primer of Negation* という副題をつけ、世俗からしだいに逃避する教授のことを書いた *The Professor's House* のあと書きともいべきものだ⁽³³⁾といっている。論旨は複雑だが要は、マイラが「私の必要とするものは金だった」とか、「貧乏は残酷だ」とか常に口にし、心の安静でも金銭だけでどうにでもなるように考えたり、また臨終近くなって十字架などをもち出すが、それは単にそれだけのことで、彼女は人生も宗教もわからないままに死んだのだといっている。この作品は現代アメリカの物質主義に対する攻撃だとみる。そしてネリーがマイラについて「彼女のような激しい性格は自らに敵対し、ついでその崇拜するものへ敵対するものだ」といった大部分を、オスワルドに向かって反撥したというよりも、むしろ彼女がオスワルドにいたっていた偶像崇拜的愛情に反撥したのだと解している。

(四)

Death Comes for the Archbishop (1927)⁽³⁴⁾ では先ず文化の花咲いたローマと野蛮な New

(28) *Willa Cather. A Memoir.* By Elizabeth Sergeant. 前出 p. 139.

(29) *On Writing.* By Willa Cather. 前出

(30) *The Last of the Provincials, The American Novel, 1915-1925.* By Maxwell Geismar. Hill and Wang, 1959.

(31) Alfred A. Knopf, 1959.

Mexico とをあざやかに印象的に対照させる。それからニューメキシコにおけるフランスの司教の血のにじむような布教の描写になる。また銀細工の方法が徐々にヨーロッパからインデアンに伝わることや、金持のメキシコ人がフランスのぶどう酒の価値を認めて手離せないものになっているなどの記述があってヨーロッパ対新大陸が扱っており、また *Shadows on the Rock* (1931)⁶² でもフランスとカナダとが対比させてあるが、こういう作品にまでジェイムズの影響を認めようというのはむりだろう。*Lucy Gayheart* (1935)⁶³ や *Sapphira and the Slave Girl* (1940)⁶⁴ になってはジェイムズのあとはほとんどない。

私が最後に注目したいのは短編集 *Obscure Destinies* (1932)⁶⁵ の中の一編 *Old Mrs. Harris* だ。ここでは作者の筆は枯れて淡々としている。彼女の短編のうちで最も長いのに動きは最もゆるい。Templeton 一家はもとテネシーに住んでいたが、主人の健康上の理由でコロラドに移り住み、彼は事務所勤めをして僅かの給料をもらって一家を支えている。妻は Victoria といい、数人の子供があり、いちばん上はことし15になる Vickie だ。ビクトリアの母 Mrs. Harris もついてきている。隣人に裕福で子供のない Mrs. Rosco がいる。ハリス夫人はいちばん汚い家事を手伝わされて虐待されているものとローゼン夫人は思っている。しかしある日テンプルトン家へ行って見て、ハリス夫人は虐待されているのではなく、年よりの義務として家事や子供のめんどうをみているので、貧乏ぐらしにもかかわらず子供たちも楽しんでいるのがわかる。とりわけハリス夫人は Blue Boy という猫をかわいがっている。こうしておいてから作者はこんどは直接ハリス夫人を描写する。夫人は年をとってからだは弱っているが、人から憐れみを乞う運命だとは思っていない。家事をするのが自分のつとめだと思っている。信仰厚くて娘を見苦しくないようにさせておきたい。つまりハリス夫人には弱い面と強い面とがある。

次にビッキーが紹介される。彼女は大学へ進みたくて今準備している。ローゼン氏がなぜ大学へ進むのかときいたとき、行きたいから行くので何の目的もないと答えた。すると彼は賞讃して Michelet の “The end is nothing, the road is all.” を引用する。あるいはこれがキャザーのこの作品へのヒントになるかもしれない。目的つまりプロットには価値はないので、過程にこそ意味があるのだと受けとれる。ついでビクトーリアが脚光を浴びる。彼女は心は悪くはないのだが、おそろしく気位が高い。しかし社会的に育てられているので家庭外では人づき合いがよい。彼女にも二つの面がある。次に南部の上流社会の基準と中西部のいなか町の粗雑な民主主義とが対比される。事件らしい事件はブルーボーイの死だ。猫が好きでもないビクトーリアは子供たちにごみだめにでもほおり捨てるように命じる。これをハリス夫人が聞いて怒り、次の朝ていねいに葬ってやるように孫たちにいう。孫たちは祖母のいいつけに従った。

(62) Alfred A. Knopf, MCMLVIII.

(63) Ibid., 1935. (Third Printing)

(64) Ibid., 1953. (Fifth Printing)

(65) Ibid., Mcmliii. (Eighth Printing)

ビクトリアはこれを聞いていったんは怒るが、しだいに優しさを見せるようになる。ここまで読んで読者に何がわかるかという点、人間は一人の眼をとおして見られた単純なものではないということだ。誰にも二面がある。最後にビッキーが入試に合格するが、莫大な学資がいることがわかる。もちろん父親は出してやれない。ローゼン夫人がこの金を貸してやることになるが、それは読者と同じように複雑な人間の内面の模様がわかったからだ。キャザーは描写はするが説明はしない。ローゼン夫人の眼をとおしたり、いろいろな出来事に対する反応でそれ自体を自然に展開させる。これが劇的手法で、ジェイムズが到達した手法なのだ。この手法をキャザー独自のやりかたで適用したまでだ。

ジェイムズでは異性も現世も放棄するということがよく起る。これはぜいたくとも思えるほどで、これが彼が一般受けがしない理由の一つでもあるだろう。*Ambassadors* を引っぱり出すまでもなく、彼には「人生を十分に生きたい」という考えがついて離れない。これは人生を十分に生きなかったものの発言で、これが現世放棄や断念に通じるだろう。*The Professor's House* や *The Old Beauty and Others* (1948) 中の一編 *The Old Beauty* で見えるように、キャザーも現世否定の態度をとる。しかし彼女の場合ではそれはよい過去への郷愁へとつながる。ただしこれは類似点をあげたので何もジェイムズの影響ではない。

以上ジェイムズがキャザーにおよぼした影響というか波紋というか——そういうものを概観した。直接の影響でないにしてもジェイムズを背景におかないでは考えられないようなものもある。習作期では主題的にも技巧的にも影響を受けた。成熟するにつれ主題的影響からはやや脱皮した。しかし彼女のように外形と内容とを不可分のものと考え、特にいかに描写するかということが念頭から離れない作家には技巧ということは重要なことになる。そういう方面ではジェイムズと考えを同じくしたから、ほとんど最後まで彼の影響を受けたのも当然といえば当然だろう。彼女以前にたとえジェイムズがいなくとも彼女なりの文学をたしかに創り出しただろう。しかし彼を学んだことで彼女独自の作品に——特にその重要なものにみがきがかかったことも同様にたしかだろう。

VI F. Scott Fitzgerald (1896—1940)

これからは第一次大戦以後の時代になる。ジェイムズは1916年他界するし、彼が若い世代に愛読されるという時代は過ぎ去った。だから今までは彼の影響はウォートンやキャザーに見るように直接的だったが、これからはやや間接的になる。彼の影響は全世界に弥漫したため、それだけ稀薄になったともいえよう。

(36) Alfred A. Knopf, 1953. (Fourth Printing)

(37) キャザーの全作品を具体的にジェイムズと関連させて述べた論文も研究書も私は手にしていない。最近では次の書が二ページにわたって論じているが、論旨は抽象的である。

Willa Cather's Gift of Sympathy. With a Preface by Harry T. Moore. By Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom. Southern Illinois University Press, 1962.

ウォートンやキャザーでは全作品を検討する必要があったが、フィッツジェラルドではその必要はあるまい。1924年までの彼の長短篇には主題的にも技巧的にもジェイムズの片影さえないからだ。 *This Side of Paradise* (1920) などはよい見本で、私小説的であり散漫だ。ところがジェイムズの文学は緊密であり選択的であって、フィッツジェラルドとちょうど対照的だ。彼が少年の頃ジェイムズとウェルズとの文学論争があり、それは開戦とほとんど同時に二人を不和にしたままで終わった。ジェイムズによると、ウェルズの文学は「飽和」(saturation)の文学で、真の文学は選択的で一つの目的をもたねばならぬという⁽¹⁾。そしてフィッツジェラルドの文学はこの飽和の文学にあたる。こういう文学が全面的に悪いというのではないが、彼の場合ではロウゼンフェルドが早くから指摘したように、作者と作品との間に隔離がない⁽²⁾。こういう彼が1925年になってジェイムズ的劇的手法の *The Great Gatsby*⁽³⁾ を書くようになったのはどういう径路によるのか——ということがいろいろ問題になっている。これは解説するまでもなく、Daisy という女と成り上りものの Jay Gatsby との物語を、観察者・話者の Nick Carraway の眼をとおして、アメリカの拝金主義の空しさを描いたもので、ジェイムズ風に緊密に構成してある。端的に私見を述べると、彼はコンラッドを仲継にしてジェイムズから影響を受けている。

いろいろ友人や出版社からの勧誘や忠告もあって、彼は自分を作品から引離したものを書くことにちがいない。そしていろいろ探求している。そしてジェイムズ—ウェルズ論争のことは知っていたらうから、それまでは異質だったジェイムズ系統のものに心が傾いたとも察せられる。先ず彼がジェイムズを読んだかどうかの問題だ。ヴァン・ワイック・ブルックスがフィッツジェラルドに向ってジェイムズの問題に触れたとき、フィッツジェラルドは I don't know anything about James myself. I've never read a word of him. といった⁽⁴⁾。しかし「一語も読んだことがない」というのはその場の誇張で、Daisy Miller や The American ぐらいは読んだだろう。だからカウリーが *The Great Gatsby* に出る Daisy は *Daisy Miller*⁽⁵⁾ に由来するだろうと臆測するようになる。ただしこれは考えすぎだろう。それはそれとしてこの方面では作者が *The Great Gatsby* につけた「序文」をいちばん重んじなければなるまい⁽⁶⁾。それによると彼はこの作品を書く以前コンラッドが *The Nigger* につけた「序文」を再三再

(1) *Introduction to Henry James & H. G. Wells, A Record of their Friendship, their Debate on the Art of Fiction, and their Quarrel.* Edited with an Introduction by Leon Edel and Gordon N. Ray. Rupert Hart-Davis, 1958.

(2) *F. Scott Fitzgerald* by Paul Rosenfeld. *Men Seen* (New York: Dial Press, 1925). Reprinted in *The Great Gatsby, a study* by F. J. Hoffman. Scribner's, 1962.

(3) *Three Novels of F. Scott Fitzgerald.* With Introductions by Malcolm Cowley and Edmund Wilson Scribner's, 1951.

(4) *The Far Side of Paradise, A Biography of F. Scott Fitzgerald.* By Arthur Mizener. A Vintage Book, 1961. p. 166.

(5) *Three Novels of F. Scott Fitzgerald.* Introduction by Malcolm Cowley. p. xviii.

(6) *An Introduction to The Great Gatsby.* By the Author. Modern Library, 1934.

四読んだという。この序文の重要な点は、「私の仕事は描写力によってあなたに聞かせ、あなたに感じさせ——とりわけあなたに見せることです」というにある⁽⁷⁾。これから彼はあるものを感得したにちがいない。そしてコンラッドはジェイムズから影響を受けた人だ。

ジェイムズ系統の作家はコンラッドだけではない。自国にウォートンやキャザーがいる。むしろ彼は20年代の花々しい存在だったウォートンは愛読し、前章でも述べたようにキャザーも読んでいる。しかし Gilbert Seldes がいうように⁽⁸⁾、ウォートンを仲継にしてジェイムズの手法を引き出したというには前章で言及したように賛成できない。(カウリーも同意見だ。)彼女は劇的手法という方面ではジェイムズから多くを学んでいないからだ。前節で述べたようにむしろキャザーから学んだ方が多かったといえよう。ミラーも同様のことをいっている⁽⁹⁾。ともかくジェイムズが源流だという点では批評家の一致した意見だ。T. S. エリオットはフィッツジェラルドからこの作品を贈られて礼状を出している。エリオットの手紙は中断されているのははっきりしたことはわからないが、技巧上のことをいっているのは十中八九たしかだろう。In fact it seems to me to be the first step that American fiction has taken since Henry James⁽¹⁰⁾……

以上のようなわけなので、シェインが *The Great Gatsby* を論じて、His discovery of Conrad and James is sometimes given credit for teaching him a new sense of proportion and control over form.⁽¹¹⁾ といっているのは誤解を与えないでもない。

Tender Is the Night は精神病医 Diver の Nicole と映画女優 Rosemary をめぐっての崩壊を書いたもので、これには私の手もとに二つの版がある。1934年の初版と1951年の改訂版⁽¹²⁾だ。作者は初版が不満で大改訂をしたわけだが、どういう風に改訂したかは作者のノートブックからも一目瞭然とする。つまり初版では文学的効果をあげるため事件の配列が乱してあったのを、改訂版では配列を年代順に直し、それに伴って起る変化も訂したものだ。どちらの版がすぐれているか今にわかには確言できないが、今ここで私に関心があるのは初版だ。フィッツジェラルドはこの作品を書くにあたってやはりコンラッドが念頭にあった。ノートブックに次のようにある⁽¹³⁾。

(7) *Preface to The Nigger of the Narcissus*. J. M. Dent & Sons, 1937.

(8) *The Far Side of Paradise*, 前出 p. 186.

(9) *The Fictional Technique of Scott Fitzgerald*. By James E. Miller. Martinus Hijhoff, 1957. p. 78.

(10) *The Crack-Up*. By F. Scott Fitzgerald. Edited by Edmund Wilson. A New Directions, 1959. p. 310. From T. S. Eliot, 31st December, 1925.

(11) *F. Scott Fitzgerald*. By Charles E. Shain. University of Minnesota Press, 1961. p. 32.

(12) 初版によるもの: *Scott Fitzgerald*. Vol. II. The Bodley Head, 1959.

改訂版によるもの: *Three Novels of F. Scott Fitzgerald. Tender is the Night*. Introduction by Malcolm Cowley. Scribner's 1953.

(13) *The Crack-Up*. pp. 180-1.

(14) *Ibid.*, p. 179.

Conrad's secret theory examined: He knew that things do transpire about people. Therefore he wrote the truth and transposed it to parallel to give that quality, adding confusion however to his structure. Nevertheless, there is in his scheme a desire to imitate life which is in all the big shots. Have I such an idea in the composition of this book?

このあたりは *Tender is the Night* についての手記なので、「この本」といっているのがこの作品にあたることは確実だ。「いろいろ書けば人間のことはそれとなくわかるものだ」とか、「だから真実を書き、そういう効果を出そうとして一致するように配列を並べかえるが、その上構成に混雑感を与えた」というのはこの作品にもあてはまる。つまり初版で事件の年代の順序を乱したのはこういう考えかたによるだろう。1914年にはコンラッドは *Chance* というジェイムズの手法を適用展開させた三段構えの複雑な作品を書いている。フィッツジェラルドのこの作品の複雑さもそういうところに根源があるだろう。

最後の未完の作品 *The Last Tycoon* (1941) では映画界の独裁者つまり「大君」であるプロデューサー Stahr の崩壊を書こうとした。作者の残した手記などを資料にしてエドモンド・ウィルソンが精密に編集した完成した場合の見取図があるが、これはあくまで未完成作で、文学的価値については断定的なことはいえない。その手法がここでは関係がある。「この作品はともかく意図においては *Gatsby* と同じように私から離れています」とマーフィーあてに書き、またスクリブナーの編集者パーキンズには、「ある書物が他の書物に似ているというようなことがあるとすれば、私の書物のうちでこの書物がまあいちばん *The Great Gatsby* に似ているでしょう」と書いている。つまり似ているということの重要な点は、*The Great Gatsby* の場合と同じように *Cecilia* という娘の眼をとおして劇的手法で書こうとしたということだ。そしてこれはコンラッドから学びとったものだ。

以上三つの作品を調べたが、どれにもコンラッドを介在にしたジェイムズの影響が見える。

(15) *Three Novels of F. Scott Fitzgerald. The Last Tycoon.* Edited and with Introduction by Edmund Wilson. Scribner's, 1953.

(16) *The Crack-Up*. p. 282, To Gerald Murphy, September 14, 1940.

(17) *The Fictional Technique of Scott Fitzgerald*. 前出 p. 113.